

池田謙齋伝 補遺

長門 谷 洋 治

初代東京大学医学部総理 池田謙齋(一八四一—一九一八、

宮中顧問官陸軍一等軍医正従二位勲一等医学博士、以下謙齋)に

ついては、堀江健也先生が、謙齋の実子 高崎斐子氏(一八

九三生、東京在住)をはじめとする一族のかたと連絡をとり

つつ調査・研究を進められ、その成果の一部は本誌(第二九

巻四号 四二八頁 昭和五八年)などに発表されたが、完結を

みないうちに、病いを得られて昭和五十八年十二月死亡さ

れた。そのことを惜しまれた先生の友人 古川明先生は小

生に続稿を書くようにと依頼してこられた。謙齋の研究も

していない小生にとってこれは大変な難題であったが、実

は小生が、『大百科事典』(平凡社 昭和五十九年)の謙齋の項

を担当したことをふまえてのご依頼であった。これより

先、同事典が出版された直後の昭和五九年秋に、東京の鈴

木才子という未知のかたからお電話をいただいたが、同氏

は謙齋一族の子孫の一人で、謙齋伝の編集を進めていられる由。むろん上述の堀江先生とはご生前に連絡があり、また近時謙齋が明治三年からドイツへ留学したさいに家人に出した書簡が発見され、それを解読中とのことであった(『池田謙齋 プロイセン国ベルリン 一八七〇—一八七三』彩雲堂 昭五九に収録)。

一族のかたのご縁に加えて古川先生のご依頼もあり、改めて謙齋についていささかの調査を行い、そのまゝ本誌に投稿中である。ここに『大百科事典』の拙稿を引用させていただく(第一巻 八六六頁)

いけだけんさい 池田謙齋 一八四一—一九一八(天保十二—大正七)

維新から明治時代の医師で、日本近代医学の方向を示したパイオニアの一人。新潟県出身。入沢健蔵の次男で、幕府医員池田玄仲の養子となる。緒方洪庵に学び、一八六二年(文久二)西洋医学所入学。六四年(元治一)幕命で長崎の精得館に行きボードイン Anthonius F. Baudin らに学ぶ。六八年(明治一)江戸に帰り、政府に用いられ大学大

助教、小典医となる。七〇—七六年ベルリン大学に留学。

陸軍軍医監(のち陸軍一等軍医正)、三等侍医(のち侍医局長)、東京医学校長を経て七七年初代東京医科大学総理、八八年日本最初の医学博士号を受ける。九八年男爵、一九〇二年宮中顧問官。戊辰、西南、日清の各戦争に従軍するなど各方面で活躍した。

文中 Antonius は Antonius、東京医科大学総理は東京大学医学部総理の誤である。

(大阪府豊中市 皮膚科開業)

E・ベルツの病理学総論講義 について

安井 広

E・ベルツは日本に来た一八七六年(明治九)から一〇年間東京大学で病理学を講義した。そのうち総論の内容をつたえるものに、学生のノートをもとにまとめて印刷したと思われる講本がある。この講本はずさんなものであるが、ほかに資料が見つからなかったためこれによった。

ベルツは病理学をワグネル教授に、内科学をウンデルリヒ教授に学んだ。時代背景としてウィルヒョウは一八五八年(安政五)に『細胞病理学』第一版を、一八七一年(明治四)に増訂第四版を著わし、その間一八六三年(文久三)に『病理腫瘍』を著わした。これらの著書はそれまでの病理観を大きく転換させた。またベルツが日本に来る前後から細菌学がめざましい発達をとげた。ベルツの講本が何年に印刷されたかわからないが、一〇年の間には講義内容も